

第 4 部

事 例 紹 介



相手の立場に立った思いやりのある行動がとれるように ～福祉体験学習の取り組み～

津山市立高倉小学校

津山市立高倉小学校は、児童数約 110 人です。

ここでは、次の 2 つをポイントに行われた、5 年生の福祉体験学習の実践について紹介します。

実践のポイント

- ①障がいのある人との福祉体験を重ねることによって、自己を高め、実生活の中でも、相手の立場に立った思いやりのある行動がとれるようにする。
- ②あいさつや、学習したことを、相手に伝えるなど、コミュニケーション能力の向上を養う。



●福祉教育に取り組むようになったきっかけ・理由

5 年生は、学校内で一番人数が多く、活気のある学年ですが、自己主張が強い面もあり、相手の気持ちを思いやることができにくい面もありました。また、学区には、特別養護老人ホーム「高寿園」、グループホーム「ほほえみ」等の福祉施設があります。学年の実態と、福祉的環境に恵まれていることもあり、学年当初から、総合的な学習を「福祉体験学習」に重点を置き、社会福祉についての認識を深めるとともに、平素から相手の立場に立った思いやりのある行動がとれることを願い本単元を設定しました。

気づきやポイント
などを書いてください

●活動内容

- ①特別養護老人ホーム「高寿園」で生活される方との交流 7 月（2 時間）
- ②視覚障がいのある人との交流学習 6 月（7 時間）
 - ・事前学習（1 時間）
視覚障がいと生活の様子について学習。
 - ・高倉小学校で 1 日交流（6 時間）
授業の聴学（1）
一緒にゲーム（アイマスクをして、鈴の入ったサッカーボール、
点字トランプ、オセロ）（2）
盲導犬・音声時計・音声パソコン体験（2）
- ③車椅子体験学習 6 月（2 時間）
- ④聴覚障がいのある人との交流学習 2・3 月（6 時間）
 - ・手話体験教室（2）
 - ・手話劇講習（2）
 - ・手話劇発表会／手話サークルとの交流（1）
 - ・手話サークルによる手話劇（1）

●評価について

本単元の学習は、高寿園の方や、点字ボランティア、手話サークルをはじめとして、津山市社会福祉協議会の方々に大変お世話になって実践されました。福祉施設を訪問したり、社会福祉協議会の方々を度々お迎えするときの、意欲面や礼儀・あいさつなどの態度面を評価の対象としました。また、お礼の手紙などは、学習したことや感謝の気持ちをまとめて、いかに相手に伝えるかというコミュニケーション能力を養う手がかりになるので評価の対象としました。

●成果と課題

特別養護老人ホーム「高寿園」を訪問した後、高寿園で生活される方から、優しい手紙が5年生の子どもたちの元に届きました。5年生との交流を通して心が和んだことに対してのお礼の言葉が述べられていました。また、視覚障がいのある人は、子どもたちと年齢が近いこともあり、親近感を覚え、学習した点字を使って、文通している子どももいます。

足が不自由なため、車椅子の生活をしている方との交流を通しては、車を運転して遠くにでも行かれることに感動していました。トイレや駐車場に車椅子用のマークがあることにもあらためて気づいていました。また、一口に障がいがある人と言っても、生来障がいがある人もあれば、高熱や交通事故で障がいをもつようになった人もいることも教えていただきました。そういう障がいがある人が生活するためには、みんなの協力が必要なことも強く気づくことができました。

最後の手話劇の内容は、「浦島太郎」「うさぎとかめ」などの日本の昔話ですが、本気で見てくださる聴覚障がいがある人の前で、素直に手話やパントマイムを使って劇ができていました。さらに、度々、福祉関係のお客様を迎えるに当たって、あいさつや案内が子どもたちだけで進んでできている場面も見られるようになりました。クラスの子どもたちが全て自己を高め、相手の立場に立った言動ができるようになったとは言えませんが、この1年間の取り組みが、少しだけでも心に響き、心を耕していると言ってよいでしょう。優しく思いやりがあり、よく考えた行動は、普段の生活の中でも自然と実践できるようになることが今後の課題です。

地域福祉に参加し、児童の実践力を培う総合的な学習の取り組み ～清音小ふれあいサロンを開こう～

総社市立清音小学校

総社市立清音小学校は、児童数約 300 人で、平成 17 年に総社市に合併しました。平成 11 年から 4 年間総合的な学習の時間や生活科の実践に取り組み、カリキュラム開発や授業研究を進め、学校独自の取り組みが定着しています。

ここでは、5 年生の総合的な学習の実践について紹介します。



●福祉教育に取り組むようになったきっかけ・理由

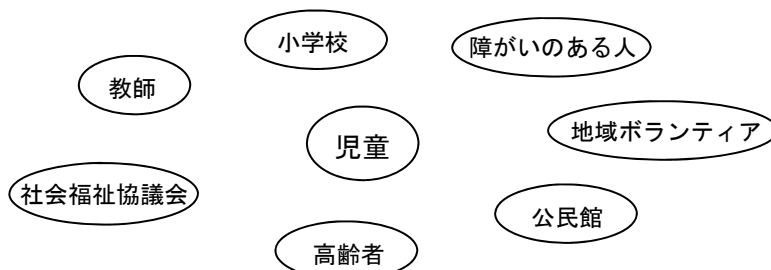
旧清音村では、「快適環境推進の村」を宣言し、快適な環境づくりに力をいれていました。福祉センターを中心とした公的な介護サービスの他に、地区のボランティアが中心になって開催している「清音ふれあいサロン」があります。

そこで、5 年生の児童自身による「清音小ふれあいサロン」の開催を核とする学習を考えました。地域のふれあいサロンの様子をビデオで見たり、地域ボランティアや障がいのある人から話を聞いたりすることにより、高齢者の願いや生き甲斐、加えて、誰もが暮らしやすい社会を築いていくことの必要性やその意味についての理解を深めていきたいと考えました。障がいのある人や高齢者について、単に表面的な理解にとどまらず、地域ボランティアの一員という自覚をもってサロンを運営することは、地域福祉に参加し、貢献するとともに、児童の社会的な実践力を培う機会になると考えました。

●福祉教育をすすめるための地域の社会資源

学習を進めるために、地区の社会福祉協議会との連携を図り、協力を依頼しました。地域ボランティアにも計画の概要を説明するとともに、協力をお願いし、地域の高齢者の方への説明をしていただきました。社協、地域ボランティアなどとの連絡や打ち合わせを、取り組みの前や途中など随時行いながら実践していきました。また、社協と成果や反省点などを話し合う会を行い、次の実践に生かしました。

気づきやポイント
などを書いてください



●福祉教育の17年度の実践（全86時間）

問題把握（12時間）

- 5月 ふれあいサロンの様子をビデオで見る。
- 6月 社会福祉協議会の方や地域ボランティアのお話を聞く。
学校放送番組「みんな生きている」を見て話し合う。
障がいのある人のお話（テーマ 共に生きる）を聞く。
- 7月 5年生の目標・自分の目標について考える。
- 9月 高齢者疑似体験をする。

問題追究（64時間）

- 9月 地区別のグループに分かれてサロンの計画を立てる。
地域ボランティアに来ていただき、計画の検討会を開く。
計画をもとにふれあいサロンの準備をする。
- 10月 高齢者の家まで招待状を届ける。返事を受け取りに行く。
第1回ふれあいサロンを開く。（会場 小学校の図書館）



◀ピンポンホッケーを楽しむ様子

反省会をする。

- 11月 計画を立て、第2回目ふれあいサロンの準備をする。
高齢者の家まで招待状を届ける。返事を受け取りに行く。
- 12月 第2回ふれあいサロンを開く。（会場 地域の公会堂）



▲手づくりおやつを食べながらおしゃべ



▲写真立てのリースづくり

反省会をする。

発展（10時間）

- 1月 学習を振り返り、まとめをする。ホームページを作る。
- 2月 サロン開催を受け継いでもらうために4年生に伝える。

●これまでの成果

問題把握の場面では、地域ボランティアや社会福祉協議会の方からお話を聞くことで、ふれあいサロンの目的や会に参加する高齢者の方の思いなどを知り、「ノーマライゼーション」ということについて理解を深めることができました。また、脳性麻痺という障がいもちながら、自立した生活を送っている方のお話を聞くことで、真の福祉とは何かを考えることができました。さらに、年齢や障がいの有無にかかわらず、人として自分らしく生きることの大切さや、同じ人間同士が地域の中で共に支え合うことの必要性を理解することができたように思いました。

問題追究の場面では、自分の担当の高齢者を決め、2回のサロンを通して関わりをもつようにすることで、児童一人ひとりが責任をもち、相手意識をもった関わりが自然にできる児童が多くなりました。また、招待状の配布、返事の受け取り、サロン当日の交流と繰り返し交流する機会を設けることで、お互いの名前や顔を覚えることができ、児童も高齢者も継続的で親密な関係を築くことができました。

全体を通して、児童が生き生きと活動し、やり遂げた達成感をもつことができました。高齢者の方との2回の温かい交流を通して、人と人とのつながりの大切さを感じるすることができたように思います。また、高齢者に対する意識が変わり、普段の生活でも学習したことを生かしている児童や、今でも手紙のやりとりなど交流を続けている児童もいました。福祉に対する理解が深まり、社会的な実践力を培う機会になったように思います。

●これから

今までの5年間で、清音学区のすべての地区で児童の運営によるサロンを開くことができました。18年度からの2巡目のサロン開催を地域の方がたいへん楽しみにしていると聞きました。児童の学びと地域の願いを大切にするためにも、福祉教育に対する教師自身の意識を子どもたちと共に高めていく必要があります。

* この事例のポイント

サロン開催に向けて福祉について学び、児童が住んでいる地域で実践していくことです。

小学生福祉体験教室

きっかけ：やさしい心を育むためには、小さい頃から福祉にふれ、あたたかい心にふれることが大切であり、この体験教室がその機会になればと願って実施

目 標：高齢者と交流したり、一緒に作業することで、あたたかい心にふれ、相手の立場や気持ちを考え、やさしい気持ちになり、親切にすることができる。

対 象：小学校4・5・6年生の児童

進め方：1日目

高齢者の身体の特徴や気持ちを知る。(話を聞く)

高齢者擬似体験をする。

施設体験の準備をする。(歌、プレゼントづくりなど)

老人福祉施設の高齢者と交流する。

2日目

高齢者生きがいセンターの高齢者と一緒に

木工作品をつくる。

2日間の体験教室を振り返って感想文を書く。

福祉体験学習

目 標：老人福祉施設の訪問をし、施設で過ごされている高齢者の方々とふれあう活動を通し、福祉の現場の様子を体感したり、福祉の意味について考えたりすることができるようにし、公共施設での活動を通して、公共のマナーを学ぶ。

対 象：小学校4年生の児童

進め方：1. デイサービスの職員に話を聞く。

・車椅子の介助の仕方を教えてもらう。

2. 高齢者と話をする。

3. 歌を披露する。

4. 公共の施設で学んだことを学校生活で活かす。

総合的な学習で福祉教育に取り組んだ事例

目 標：高齢者・障がいのある人の立場や気持ちを考え、皆が気持ちよく過ごせるために自分たちにできることはないか考える。

対 象：小学校4年生の児童

進め方：1. 手話通訳士、聴覚障がいのある人を講師に招いて日常よく使う手話を教えていただく。

また、聴覚障がいのある人に日常困っていることや気をつけていることなどお話を聞く。

2. 車椅子体験、高齢者擬似体験を行い、高齢者や障がいのある人の気持ちを考え、自分たちにできることは何か話し合う。

3. 老人デイサービスセンターの高齢者と交流する。

- ・歌を披露する。
- ・お話をしたり、一緒に手遊びをする。
- ・肩たたきをしてあげる。

ジュニアボランティア養成講座

目 標：小学生（3年生以上）、中学生、高校生を対象に、思いやりあふれる住みよい地域づくり、福祉の街づくりの推進力を育成し、それぞれが連携をとりながら、地域でボランティアとして何ができるかを考え、養成講座から実践活動へと身近な地域での自主的なボランティア活動へとつなげる。

対 象：小学校3年生以上、中学生、高校生

進め方：「福祉とは？」からはじまり、さまざまな人たちとかかわり、自分たちの住むまちを体験を通して、知りながら、福祉について学習する。

参加者みんなで、地域の活動へつなげていく。



夏のボランティア体験事業での出会いが広がって ―中・高校の事例―

ボランティアサークルにご協力いただき、夏のボランティア体験事業の参加メニューを企画していただいています。その中に、ITサポートボランティアグループによるIT勉強会があります。内容は、視覚障がいがある人のグループが自分たちのIT技術向上と情報交換のために行っている勉強会に参加し、視覚障がいがある人の目になって画面やキーボード、配線状況を言葉で伝えるということです。中高生にとっては、パソコン・ITという言葉と視覚障がいがある人がパソコンを使うという点でとても興味を引くメニューとなっていたようです。当日は、グループのメンバーを前に緊張している様子でしたが、とても真剣に取り組んでいました。

この体験メニューも今年で4回目を数えますが、毎年参加を希望する生徒が増えています。また、この体験をきっかけにITサポートグループが主催する「視覚障がい者のためのIT展示会」や毎月開催される勉強会へのボランティア活動を続けている生徒もいます。

詳しくは、倉敷ITサポートボランティアのHPで
<http://www.vol.u.jp/itvolu/index.htm>



地域の一員として・・・地域活動への参加 ―中学生の事例―

長年、出前福祉講座や夏のボランティア体験事業を実施してきて、その後のボランティア活動へつなげるということが課題となっていました。

そこで、地区社会福祉協議会やいきいき子ども支援の会にも出前福祉講座への協力やボランティア体験のメニューの企画・実施をしていただくことにしました。

これらの出会いをきっかけに学区の中学校（2校）からも積極的に参加させてほしいという要望があがり、地域の行事があるごとに学校へお知らせをすると今では、100人を超す中学生ボランティアが集まるほどになっているそうです。

詳しくは、倉敷ボランティアのHPで
<http://www.vol.u.jp/>

企画：中島ボランティア協会
ITサポートボランティア
中島地区社会福祉協議会 など



地域の実態調査を行った事例

きっかけ：地区社協や民生委員、福祉委員、地域の関係団体の話し合いの中で、「一人暮らしの高齢者が多い地域であり、特に男性高齢者が参加しやすい活動はないだろうか」、「周りの人には言えないニーズを抱えているのでは？」などの声があがったこと。

目 標：地域の課題やニーズを把握し、地域の特徴や住民のニーズに合った活動を展開していきたい。

対 象：地域住民

進め方：話し合いの中で、「真のニーズを把握するためには、民生委員が把握しているニーズだけでなく、客観的な第三者の協力を得た方がよいのでは。普段言いにくい課題も出てくるかもしれない。」という意見が出たため、吉備国際大学へ協力を依頼した。先生と学生が中心となり、アンケート用紙を用いた訪問聞き取り調査を行うことになった。調査結果をもとに地域の活動や地域福祉活動計画の策定へつなげていきたい。

※地域の実情や課題を知ることで、地域への関心が高まり、住民が主体的に活動を進めていくことができるのではないのでしょうか。

“地域とともに考える”

きっかけ：S市における取り組みがきっかけ。住みよいまちづくりのため、地域住民と各種専門職、行政機関等が定期的集っています。

内容：地域における課題を解決してくため、課題を共有し“ともに考える”ことで、困難事例と一緒に関わったり、新たなサービスを開発するなど、より住みよいまちづくりのための活動に参加しています。

主な参加者：民生児童委員、福祉委員、愛育委員、各種サービス事業者、居宅介護支援事業所、社会福祉協議会、地域包括支援センター、関係行政機関等々

感じたこと：当施設（老人福祉施設）から、通所サービス事業所、居宅介護支援事業所からエリアの3地域に参加しています。自分たちの暮らす地域を住民自らの力でよくしていきたいという熱い想いが感じられます。“ともに考える”ことの大切さを学びました。

地域の婦人会（〇〇クラブ）との施設交流

きっかけ：地元にてきた特別養護老人ホームに「地元婦人会として何かできないか？」という声があがり、定期的にシーツ交換や各種行事の手伝いに来ていただくことになる。

目標：毎週1回施設を訪問してもらうことで施設への偏見をなくし地域にとけこんだ施設を目指す。

対象：地元の婦人会のメンバー

進め方：1. 地域にある高齢者施設の機能や役割を理解してもらい、定期的に足を運んでもらうことで偏見をなくしていく。
2. 施設の行事に招待することで入居者と交わる機会をつくり自主的に施設の運営に協力してもらえるような関係を築く。

※ 定期的に足を運んでもらうことで施設が特別なものではなく、親しみを感じてもらえる施設になったと思います。

総合的な学習で福祉教育に取り組んだ事例「羽ばたけ ○○ ボランティア隊」

目 標：高齢者福祉に関心を持ち、高齢者との交流を通して、相手の立場や気持ちを考え、親切にすることができる。

高齢者福祉が家庭や地域、施設の職員の方に支えられていることに気づき、自分にできることを考え、実行することができる。

対 象：小学校4年生の児童

進め方：

- 1 高齢者の立場を体験し、気持ちを考えてみよう。(アイマスク・車いす体験など)
- 2 福祉施設で働いている人にお話を聞こう。
- 3 老人ホームの高齢者と交流しよう。
 - ・車いすの介助の仕方を教えてもらう。
 - ・高齢者の役に立つ道具の作り方を調べて作る。
 - ・話題を考え、話しやすい内容で話しかける。
 - ・歌や演奏を披露する。
- 4 高齢者のことを全校のみんなに知らせよう。

高齢者との交流会（予定）の事例—小学校の事例—

企 画：3・4年児童

調 整：担任と社会福祉協議会の担当者

例年、児童のボランティアに関わる活動のひとつとして、3・4年生（複式学級）は、地域の高齢者（80歳以上）との交流会を実施している。

本年度も子どもたちがどういう活動をしたか話し合っって計画をたてた。ちょうど国語の学習で昔のことで取り上げた教材があり、「昔の子どもたちはどんな遊びをしていたのだろう。」「どんなおもちゃで遊んでいたのだろう。」という疑問が出て、今回、高齢者の方に昔のおもちゃを教えてもらいながら、自分たちも作ってみることにした。（缶ぼっくり、竹馬、竹とんぼ、お手玉、水てっぽう他）その後、作ったおもちゃで高齢者と遊んで親睦を深める。その他にも簡単なゲームや肩たたきなどをする予定である。

最後に、11月に予定している学芸会の招待状を手渡して、次回の再会を約束して帰ることにしている。

毎年、高齢者とのふれあいを通して、思いやりの心をもって人と接したり、人に喜ばれたりすることの素晴らしさを体験することができ、心の教育には欠かせない活動となっている。

介護老人保健施設の利用者に敬老の日のお祝いをした事例－高校の事例－

企 画： ○○高校ボランティアクラブ

調 整： 生徒・顧問

敬老の日に伴い、隣町の介護老人保健施設へお祝いに行きました。この取り組みは今回で4回目となり、いずれも、町内や隣町の施設にお世話になり、お祝いをさせていただいています。

毎年の行事として、敬老の日に伴う施設への訪問を行っていることを、生徒に伝えると、生徒からも今年も行いたいとの要望があり、担当教諭から施設に連絡して快諾していただきました。

施設訪問の1週間前、訪問準備として、簡単なプレゼントと直筆でのメッセージカードを用意し、当日行うレクリエーション（歌・紙芝居・クイズ等）の練習を行いました。

当日、生徒 23 名・引率教員 1 名で施設を訪問し、代表生徒挨拶・歌の合唱（世界で一つだけの花・校歌）・紙芝居・クイズ・交流会・花束贈呈・プレゼント贈呈・代表生徒お礼の言葉等を行い、約 1 時間、利用者の方と楽しい時間を過ごさせて頂きました。

クイズでは、生徒が問題を出題し、利用者さんに手をあげ答えていただき、正解した利用者さんに生徒がお祝いの握手をしました。交流会では、一人ひとりの利用者さんと生徒が向き合い交流を深めました。プレゼント贈呈では、プレゼントの数が足りず迷惑を掛けてしまいました。しかし、全体的に利用者さんに大変喜んでいただいたので大変よかったです。

後日、数名の生徒宛に、利用者さんからお礼の手紙が届き、生徒は大変喜んでいました。

人への善意の気持ちや行動が、相手を幸せにし、それによって自分自身も幸せになれる、そんな瞬間を垣間見た気がしました。このような、幸せの循環を実践していきたいと感じました。

介護老人保健施設への訪問－小学校の事例－

企 画： 児童会

調 整： 児童会と担当教諭、施設の担当者

例年 2 学期後半と 3 学期前半にかけて介護老人保健施設へ訪問し交流している。児童会企画委員と 3～6 年生以上の有志が訪問する。交流を深めるために施設の方と一っしょに歌を歌ったり、風船バレーをしたり肩たたきをしてあげたりした。また音楽の時間に学習した歌や演奏も聞いてもらった。また、手品やけん玉などの技を披露して喜んでもらった。聞いてもらうだけでなく、施設の方にいろいろと話しかけられて多少とまどう児童もいたが楽しく交流をすることができた。帰る前にみんなと握手をした時に、思わず涙される方々に児童も心が熱くなったようだ。

三世代交流－中学校の事例－

〇〇中学校では、毎年、各地区ごとに「三世代交流」を行っている。今年で8年目となるこの活動は、各地区（10地区）ごとに中学生がリーダーシップをとり、保護者や老人クラブおよび保育園児・小学生とその保護者など各地区の正に三世代の人たちで、餅つきやそうめん流しなどをしていっしょに食べたり、ゲートボールやグランドゴルフをしたり、しめ縄づくりをお年寄りから教えていただくなどして交流を深めるものです。

当日までの取り組みは、次のとおりです。

- ・ 5月 第1回地区長会を開く。（地区長＝中学生）
ここで今年度の取り組みに向けての手順・時期・各地区班会の内容などについて確認をする。
- ・ 6月 地区別班会
各地区ごとに、内容・時期などについて話し合う。
〇〇町連合PTA役員会、子育て地域活動の会
この活動の支援をしていただく連合PTAおよび子育て地域活動の会の方々に、今年度の取り組みについての説明と支援のお願いをする。
- ・ 6～7月 地区別親子会
各地区ごとに中学生が決めた内容を、保護者・老人クラブに報告するとともに参加依頼をする。
- ・ 8～12月 三世代交流（各地区ごと）
日時は、各地区ごとに設定する。

近年、生徒数が減少してきており各地区中学生個々の取り組みへの負担が増えたりするなどの課題もあるが、今年で8年目であり各地区の人たちも大変協力的であり、楽しい充実した活動になっている。

〇〇わいわいサロンの参加の事例－小学校の事例－

「〇〇わいわいサロン」は、学校週5日制にともない月1回の土曜日に小学生の体験活動の場として〇〇公民館を会場にその家族と中学生を交えたボランティア活動が行われているが、午前中の料理教室で昼食やおやつを作り、午後はスポーツやゲームなどでふれあいを深めている。毎回ではないが、中学生が数名、自主的に参加している。中学校でもわいわいサロンがある土曜日はできるだけ部活動を入れないなどの配慮をし、参加しやすいようにしている。

地域の敬老会へ参加した事例ー小学校の事例ー

学区の敬老会を主催している公民館より敬老会への児童参加の依頼があり、お年寄りへの感謝の念など子どもたちの情操を高めるよい機会であると考え、敬老会に招待されているお年寄りに全校児童で手紙を書くことと4年児童12名が当日簡単な出し物を演じることにした。

児童数82名に対して該当のお年寄りが約330名であったので簡単な手紙になったが、子どもたちはそれぞれ短い文の中に思いを込めて書くことができた。

また、当日出演することになった4年生は昔話の「3枚のお札」を学級全員で順々に語るよびかけにして演じることにした。9月に入って朝の会や帰りの会の時間を利用して練習を重ねたので、当日も自信をもって演じることができ、招待されているお年寄りや参加者から大きな拍手を受けた。

体育会に高齢者を招待した事例ー中学校の事例ー

体育会に地域の高齢者を招待し、楽しんでいただいた。招待の文書は保護者のPTA理事の方が配布して下さった。

当日は、高齢者優先席とテントを用意し、ボランティアの生徒が接待をした。生徒は高齢者の前で立派な演技をすることができた。

後日、3年生が総合的な学習の時間の一環として高齢者にご来覧のお礼の手紙を送った。これに対して高齢者からさらにお礼の電話や手紙が届いている。

特別養護老人ホームへのプレゼントー小学校の事例ー

1・2年生児童と有志で施設に訪問に参加しなかった3～6年生児童により、特別養護老人ホームへプレゼントを作り送った。児童はいろいろと思いを巡らせプレゼントを作ったが、施設ではかなり重度の方がおられたり、置き場所に困るなどのことが送ってからわかり、もう少し事前にお互いの担当の方でこまかい部分について話を詰めておけばよかった。

地域のお年寄りに手づくりプレゼントを…12月～1月ー小学校の事例ー

5・6年生が家庭科・総合学習の時間を活用し、地域のお年寄りに手作りのプレゼントを贈る予定である。自分たちは地域の中で守られ育てられており、目に見えないところでもお世話になっていることを学習し、自分たちでできることはないだろうか考えさせ、地域のお年寄りに手作りのプレゼント（マフラー・なべつかみ・ふきん等）を贈る計画である。

昨年、一人暮らしの老人の方を対象にしたが、独居であることを知られたくないという方がいたので、今年度は、地域をもっと知ることを主眼とし、プレゼントをするお年寄りを自分の力で探すように考えている。

一人暮らしの高齢者の家を訪問した事例ー中学校の事例ー

企 画： 学校

調 整： 学年担当教諭とその学年の生徒

地域には、一人暮らしのお年寄りが多く、その家を訪問して、何かできればと企画した。

まず、生徒が自分の家の近くの一人居るお年寄りに電話をし、訪問の予約をとった。

予約できたら、何をしたいか考え、遊びやプレゼントの準備をした。

4月から学校園で育てていた花を、プレゼント用にラッピングし、当日持って行った。

前もって話をしてあげたい内容などを考えては行ったが、当日はあまり話ができなかった生徒もあったようだった。

花は大変喜んでもらった。

しかし、お年寄りといろいろなことを話したり、お手伝いできて、充実した時間が過ごせたようだ。

花を育て、一人暮らしの高齢者宅へ配った事例－小学校の事例－

企 画：ボランティア委員会

調 整：児童会・担当教諭

ボランティア委員会の提案により、日頃お世話になっている人たちや一人暮らしのおじいさん・おばあさんに花の苗を贈ろうということが児童会で決まった。

全校一人1ポットを分担し、9月末にキンセンカの種を植えた。各学年で世話をし、ポットを入れる入れ物を縦割り班で作った。1月中旬に、入れ物に入れたキンセンカの苗を4・5・6年生で配った。

後日、お手紙を書いてくださった高齢者の方もいて喜ばれたようだ。

学区内の一人暮らしの高齢者宅を訪問した事例－中学校の事例－

本校では、花の栽培を盛んに行っている。その活動を生かしながら、自分たちが住んでいる地域に貢献する福祉活動を行えないかと考えた。そこで、自分たちで栽培した花を地域の一人暮らしのお年寄りへプレゼントしようと、本校ボランティア担当教諭と生徒会執行部の生徒で企画をした。

まず、6月中旬に、社会福祉協議会に協力をいただき、学区内の一人暮らしのお年寄りの方の名前を調べた。昨年の資料であったために、その名簿をもって、地区の市民センターを訪れ、転出や転入された方や正確な名前などを確認し、75歳以上の53名の一人暮らしのお年寄りの方を訪れることにした。

7月上旬に、本校で初めての取り組みなので、全校集会を開き、趣旨説明をするとともに、訪問するお年寄りの分担を決めた。そして、お年寄りの方へ手渡す手紙を書いたり、マリーゴールドを植えた鉢を準備したりした。

夏休みに入ってすぐに、自分が書いた手紙とマリーゴールドの鉢、趣旨説明の生徒会からの文書をもって、全校生徒が一斉に一人暮らしのお年寄りのお宅を訪問した。地区ごとに教員が巡回し、安全面にも配慮をした。訪問を受けられたお年寄りの方は、涙を流して喜ばれたり、お土産に缶ジュースやお菓子を出してくれたりなど、大変好評であった。また、生徒もお年寄りの方と交流して、喜んでいただき、大変満足していた。また、10月下旬に行われる文化祭にぜひお年寄りの方々を招きたいという希望をもつ生徒もいた。

しかし、生徒が訪問したが、長期の入院や転出はしていないが実際には他地域で家族と住んでいるために留守の方も数名いたので、事前の情報収集をもう少しする必要はあった。

1・6年生で育てた花を、地域の一人暮らしの高齢者の方へプレゼントした事例 —小学校の事例—

企 画：6年団

調 整：1・6年団

昨年から取り組みをはじめたことですが、〇〇小学校区のお年寄りの方々はこれまで〇〇地区のためにさまざまなお仕事をされ、学校のために協力してこられた方です。そのみなさんへ学校から心あたたまるプレゼントができたということと地域の老人会の代表の方に支援していただき、一人暮らしのお年寄りの方々へ鉢植えのお花をプレゼントすることにしました。

本年もこの趣旨にそって1・6年団で話し合い、1・6なかよし学級（1年と6年の仲間・・・2～3人の仲間）の仲間ごとに鉢に小さな苗を植え、毎日水やりをして大切に育てていこうと考えました。5月13日いよいよ鉢に苗を移す本番です。今年の苗は「いつも元気」という意味を持つポチュラカに決定しました。この日は雨のようで狭いテラスの上で1・6年生が体を寄せ合っただけの作業となり、作業になれていない子どもたちもいましたが、多くの子どもたちが協力し合っただけの鉢植えをすることができました。その後7月6日の鉢植えお届けの日まで、成長の様子を見たり、水やりをしたりなどなかよし学級の中まで育てていきました。

7月6日お届けの日がきました。当日は晴天で各地区のPTA役員さんも鉢運びなどに協力していただきました。鉢植えのお届けは学区が広い関係で、6年生にお願いし、1・6年生がいっしょに書いた手紙を鉢につけてお渡しすることにしました。学校に近いお宅は、子どもたちが苗を持っていきましたが、遠くのお宅もあり、また、ひとり当たりのお届けの鉢の数も多かったので、職員やPTA役員で事前に地区の公会堂などの集合場所へ運びました。6年生がそこに集まり、各家庭に持参しました。おうちへ訪問した時の言葉は考えて行きましたが、初めて出会う方に話すのは緊張もあり、むずかしかったようです。しかし、数人で言葉を分けて話し、感謝の想いをこめてさしあげることができた仲間もありました。お留守のうちには、手紙を添えて鉢を置いて帰りましたので、後でいねいなお手紙をいただいたり、電話をかけていただいたりしました。手紙のひとつには「・・・お届けいただきました時、留守をしておりました。申し訳なく思っております。直接お目にかかれなかったこと残念でなりません。封筒の中に1年生の～さんと6年生の～さんのお便りもあり、本当にうれしかったです。ありがとうございました。ポチュラカは初めて知るお花です。お選び下さった花言葉（いつも元気）通り、元気でいたいと思います。」という文面を下さった方もありました。地域のお年寄りの方々への鉢植えのプレゼントを終え、9月25日（土）には〇〇小学校の運動会においでいただき、1年生が作ったワッペンをお年寄りの方々の胸にはり、1・6年いっしょに肩たたきをする「ふれあいタイム」という種目に出させていただきました。当日運動会に来て下さった100名以上の方に、この種目に参加していただくことができました。

地域の美化に貢献するため、寄せ植えプランターを配布した事例ー中学校の事例ー

企 画：整備委員会
調 整：校長と担当教諭

地域みなさんに美しい花を楽しんでもらおうと、整備委員が委員会活動の一環としてプランターに花の寄せ植えをし、JA〇〇支所、町役場、福祉センター等に設置した。

花いっぱい運動ー小学校の事例ー

縦割り班を中心にして、花いっぱい運動を展開している。1～2学期はサルビア、2～3学期はパンジーを植え、育てている。縦割り班は、2個程度のプランターを責任をもって世話をし、水やりや草取りを欠かさないようにしている。校内や校門周辺に置いたり、集会や卒業式などで活用したりしている。

花いっぱい運動ー中学校の事例ー

全校で、町内及び学校を花で美しくしようという活動に取り組む。

《経過》

- * 教員で、事前に花の苗、プランター、土等を準備しておいた。
- * 5月21日、町内の花作りに詳しい方を招いて、指導を受けながらプランターに苗を植え付けた。その後、生徒と教職員で水やり等の世話を続ける。
- * 6月25日、町内18ヶ所の官公所・事業所に43個のプランターを配布し、飾ってもらうよう依頼した。その際、町役場において生徒会役員から町長へ花の贈呈式を行った。
- * 10月、花の植え替えを予定している。

リサイクル活動—中学校の事例—

生徒会を中心にして、全校生徒及び保護者・教職員で資源ごみの回収活動をする。

《経過》

- * 従来より行っている活動なので、町内の各家庭では、日頃から新聞紙や雑誌・空き缶等を回収できるようにしていただいている。
- * 6月中旬に生徒会総務役員でリサイクル活動への協力依頼のチラシを作成。
- * 7月1日、町広報誌配布時にチラシを全戸に配布してもらう。
- * 7月13日、地区別生徒会を開き、各地区ごとに回収作業の分担等について話し合う。
- * 8月1日、リサイクル活動実施。回収場所は、本校グラウンドと〇〇地区の役場支所前の2ヶ所とし、生徒及び保護者が担当地区の各家庭を回って集め、回収場所まで運んだ。教職員も加わり、回収品をコンテナに入れるなどの作業をした。
(後日、回収業者がコンテナを回収)
- * 10月、町内全戸にリサイクル活動協力のお礼と次年度の予定等を書いたチラシを配布予定。

クリーンアップ作戦の取り組みの事例—中学校の事例—

県や市町村が管理している道路や河川を、ボランティアで定期的に清掃する「おかやまアダプト」推進事業の合意書交付式が6月のはじめ頃振興局で行われ、本校の生徒会長が参加した。生徒会長は「これを機会にボランティア活動の輪を広げ、感謝の気持ちで清掃し住みよい地域にしたい」と決意を述べた。

生徒会の環境委員会を中心に年間4回のクリーンアップ作戦を企画し活動している。6月の第1回クリーンアップ作戦は国道沿いの花壇の草取りを生徒会執行部と環境委員会の生徒が実施し、サルビアとマリーゴールドの苗を植えた。道路や河川が花いっぱいになるよう美化運動に今後も取り組みたい。7月の第2回クリーンアップ作戦では、国道沿いや周辺の河川、公民館、駅などの4つの縦割り班にわかれてごみ拾いや清掃活動をした。11月に第3回、3月に第4回のクリーンアップ作戦を計画している。特に第3回では地元の高齢者の方と一緒にふれあいのもてるクリーンアップ作戦にしたいと生徒会環境委員会が中心になり計画しているところである。

また、今年度は全校生徒でクリーンセンターなどに行き見学する機会もあり、生徒はそれぞれにごみ分別の大切さやごみのリサイクル、リユースの大切さを改めて実感することができた。その結果、ごみを減らしたりむだ使いをしないように気をつける生徒がしだいに増えてきた。生徒からは分別しようと思ってもごみ箱の数が少ないのでごみ箱がほしいとの要望も出てきて、現在では学校に分別用のごみ箱を設置している。

地域クリーン作戦－小学校の事例－

縦割り班（1～6年、7・8人編成）で6年生のリーダーが中心となり、年間を通してさまざまな活動をしている。6年生が学校内や学校周辺で清掃を必要とする場所を探し、それぞれの班に振り分け清掃活動を行っている。日常の清掃時間でできていない場所や学校周囲の道路・地下歩道・バス停・古墳などが主な清掃場所となっている。

7月1日は拾い集めたごみを学校で分別し、環境についても考えさせるようにした。また、4年生はこれをきっかけに、総合学習の中でごみ拾いを実施し、環境学習に結びつけることができた。

第2回目は、11月に実施する予定である。

クリーン運動の事例－小学校の事例－

企 画： ボランティア担当

運 営： 5年生（総合的な学習との関連）

高齢者の会や駅等外部との交渉： 教頭

地域の高齢者の方々と一緒に、学校の周りのごみや空き缶を拾ったり、駅の清掃を行ったりした。縦割り班に分かれて、地域の高齢者の方々の助けを借りながら、協力して行うことができた。校外へ出かけるので、「車に気をつける」「草むらなど危険な場所に行かない」など安全面には十分注意した。また、駅の清掃では、無人駅なので、近くの駅と連絡を取って行った。

「自分たちの地域をきれいにし、さらに住みよい町にしよう。」「みんなに喜んでもらえるとうれしいなあ。」「疲れたけど、きれいになって気持ちがいいなあ。」「お年寄りの人と一緒に楽しかった。」等の感想があった。

その後、高齢者の方々との交流会を持って楽しいひとときを過ごした。

ユニセフへの協力の事例－中学校の事例－

給食の残飯などの生ごみの堆肥化にも取り組んでいる。できた腐葉土は学校の畑にまく予定。畑では学年ごとにサツマイモやコンニャクなどを育てているが、生徒会では野菜や球根、種などを今後、地元の方に配ったり、文化祭で販売するなどの計画も立てている。そうして得た収益金はユニセフに寄付したりする予定である。

学区にある親子孫水車の清掃活動—中学校の事例—

企 画： 生徒会

調 整： 生徒会と担当教諭

生徒会サマーボランティアとして毎年生徒会が学区内の清掃について企画し、全校生徒の中より希望者が参加している。今年は地域の名所、親子孫水車周辺の清掃に、地域に貢献しようと、17名の生徒が参加した。

当日は朝からごみ拾い、草取り、溝そうじに汗を流した。目的を達成し、また周辺住民の方にも喜んでもらい、充実した清掃活動となった。

台風16号による被災地への復旧の手伝い—高校の事例—

平成16年8月30日～31日未明にかけて、中国地方を通過した台風16号の影響で市も風雨や高潮の被害を受け、床上浸水が518棟、床下浸水が436棟という前例のない規模の被害を受けた。9月1日は学校の始業式にあたり、午後から生徒会、部活動の生徒・教員が申し出て被災地への復旧活動の手伝いに参加した。特に独居老人宅などの家具の運び出しや、海水落としなどをした。食料品、畳や機械類など、海水に浸かって使えなくなった物がたくさんあり、生徒から「もったいないな。」という声もあった。家の床や壁が変色し、いろいろなものが流され、「スリッパが片方無いよ!」「これ誰の?」という事もたくさんあった。被災地へ行ってみて、生徒も教職員も、改めて災害の恐ろしさというものを痛感した。復旧活動には三日間のべ200名、一日は授業を短縮にして参加した。生徒会・部活動をしている生徒からは自分から「明日も行くよ。」という声が出て、三日間連続して参加している生徒もいたほどであった。その反面、大変な活動なので、途中からだらけてきた生徒もいて、「いつ帰れるん?」など言ったり、座って休んでいたりと、全員ですることの難しさを感じたことでもあった。また、校内ではその週に義援金として募金を集めて、何か役に立てないだろうかという案が出て生徒会を中心に放送をかけた、クラスでの呼びかけをして集めた。9月8日に生徒会長、教頭、生徒会担当で社会福祉協議会へ持って行った。

この度の活動では、生徒の身近なところでの活動だったので比較的多くの生徒が一生懸命していたように思う。中にはどうしても自分には関係のないような顔をしている生徒がいるので、今後の課題として前向きに取り組んで行きたいと思う。

夏のボランティア参加の事例ー中学校の事例ー

7月から8月にかけて社会福祉協議会の主催している夏のボランティアに本校からも福祉ワークセンターに8名、デイサービスセンターに5名、養護老人ホームに4名が参加した。福祉ワークセンターでは利用者と一緒に各種作業をした。デイサービスセンターでは、入浴時の着脱介助、集団レク手伝い、話し相手などをした。養護老人ホームでは、ふれあい、話し相手、介護の手伝いなどをした。この夏のボランティアは生徒の自主的な参加で毎年、多数の希望がでている。本校から今年度は2・3年生が中心に参加していた。